

歴史と文学と音楽の旅

沼尻重男 (F昭35)

2004年10月9日(土)から17日(日)にかけて総勢23名が参加した。リピーターが多く、私は第1回台湾旅行以来の参加で2回目である。皆勤の石原隆良氏(D昭31)が10回目の特別企画として力を入れただけあり今回は地域文化に興味をもつ者には特に魅力的であった。

ミシシッピ上流ハンニバルへ

10月9日、22号台風の迫る中、欠航寸前で成田空港を6時間遅れで脱出、デトロイト空港で、きわどいところで最終便の国内線に間に合った。深夜セントルイスに到着し予定のスケジュールになった。宿泊ホテルは、パリのオルセー美術館と似て豪華な鉄道駅舎を利用したハイヤットホテルである。セントルイスでの鉄道の歴史上の役割を象徴している。このホテルは、米国の最大の人工モニュメントである馬蹄型のthe Gateway Arch (gateway to America's western frontier) と共に同市の二大著名建造物である。当地はミズーリ川とミシシッピ川の合流地点で中流域部にあたる。水運・鉄道の拠点で西部開拓の出発点となり、一時期は米国の三大都市に数えられる程繁栄した。その後自動車の普及と道路の整備で鉄道は衰退し豪華な駅舎はホテルになってしまった。10月10日、バスで2時間ほどの距離にあるミシシッピ川上流の港町ハンニバルを訪れた。同市は一万人ほどの町であるが有名なMark Twainの育ったところで彼の作品の大部分がここでの経験をもとに生れ、同市の観光ポイントになっている。同氏の記念館見学や観光船乗船で、このような片田舎で育った同氏のグローバルな発想は、欧州に通ずるミシシッピ川で船の仕事にたずさわったことから来たことがわかる(現在もハンニバル、ニューオーリンズ間で、月1回のクルーズ船がある)。ペンネームのMark Twainは船を出航する際に必要な水深の確認の呼び声を利用したものである。彼は地中海・黒海を航海し、欧州と米国とを比

較して米国が優れていると評価している。片道2時間、バスの車窓から見た景色はどこまでも平地でコーン畑が続き変化がない。広大な土地の感覚は20年近く住む日本人ガイドが言うには一番つかみ難いとのことである。若者達はセントルイスから離れた場所に家を建てニュータウンを造っている。「ちょっとそこまで」が車で1~2時間にあたる場所柄をみて、車の燃料・安い石油を国外に求める背景や高齢化でも運転せざるを得ない社会の厳しさを感じた。広大な土地の農産物収穫を一台のトラクターで処理する大量生産方式や画一的な加工食品の普及は日常の食生活にも影響を与えているようで、南部は特に肥満の人が多いとのことである。



Mark Twainにちなむハンニバル港(ミシシッピ川上流)
大阪外国語大学同窓会咲耶会 友金 守氏撮影

ミシシッピ中・下流の港町メンフィス

10月11日、飛行機でミシシッピ川中・下流部の港町メンフィスへ向かった。ここは都市人口の大半が黒人で占められ、キング牧師が殺されたところでもある。またロックで有名なエルビス・プレスリーの育った町で、グレースランドという豪華なマンションがある。22歳でスーパースターとなり購入したものである。今でも観光客が多数訪れ人気がある。1950年代にアメリカ黒人音楽(リズム・アンド・ブルース)と南部地方白人音楽(カントリー・アンド・ウエスタ

ン)を合流した歌の背景が感じられた。

ニューオーリンズへ

10月12日～14日、メンフィスより空路でミシシッピ川の河口に近いニューオーリンズ市に移動し、ルイジアナ・スーパードーム(約10万人収容、世界最大)に近いハイヤット・リージェンシーに2泊した。有名なナマズのフライやオイスターを食べ、フレンチ・クォーター、ジャクソン広場を見学した。またメキシコ湾に間近なミシシッピ川下流で、2時間ほど本物の大型蒸気船ナッチェス号(長さ約81m、1600人乗り、外輪船)でランチクルーズをしながらジャズライブも楽しんだ。川幅は話に聞いていたが意外と狭く日本の荒川を感じた。ただ水深は深



ツアーに参加したフランス語科OB・OGとニューオーリンズ港(ミシシッピ川河口)でうしろに大型蒸気船ナッチェス号

く外洋船が航行しており、港の貿易収支は世界で3位に入る輸送の大動脈である。ジャズ博物館、1803年ルイジアナ・バーチエスの調印場を展示する州立博物館、夜のバーボン通り、ニューオーリンズは今回の南部旅行のハイライトである。全体の印象としてアメリカでアメリカ的でない地域である。フランス人のミシシッピ川の探検で川の西側がルイ14世にちなんだルイジアナとして広大なフランスの植民地になり(その一部が現在のルイジアナ州)、ルイ15世の摂政オルレアン公にちなんだニューオーリンズ市とともに文化面でフランスの影響が残っている。もしナポレオンが当時の米国大統領ジェファソンにルイジアナを売らなかったなら歴史はど

うなっていたか、想像するのも面白い。ジャズ発祥地として有名な当地の観光は、ジャズに詳しい白土公一氏(Th昭37)の案内で助けられた。私はフランス語を専攻したがアメリカの中のフランスについてあまり関心を持っていなかった。今回の旅行は勉強になった。参加者にフランス語科OBが4人で比率が高いのはこの土地柄であろう。鈴木惟高氏(F昭45)はフランス領アフリカに駐在した経験からアフリカにいるような気分だった由。南部で有名なハリケーンはわれわれが到着する3日ほど前に去っていたのでほっとした。現地に住むガイドの話では、ハリケーン、トルネードに比べて地震は予報できないから怖いとのことだった。

ニューヨークへ

10月14日夕方、ニューヨーク到着後ミュージカル「シカゴ」を観劇した。10月15日、日中は自由時間のため、私はボストンに住む親戚を飛行機の日帰りで見学した。飛行時間40分程なのに、夕方、天候激変で飛行機の遅延、タクシーの渋滞で、ニューヨーク支部との交歓会には予定より2時間遅れで到着した。幸い参加者の全員のスピーチが終了した直後に到着、挨拶して面目を施した。短時間であったが懇親できた。現地側参加者14名(東外大9名、大阪外大5名)で女性の活躍が目立ち、情報・金融関係者が多く見られた。翌朝、出発前にワールド・トレード・センター跡を見学した。以前より高いビルを建設予定と聞きアメリカのすごさを感じた。帰国時ケネディ空港で予定の飛行機に搭乗したところ機材の故障が発見され、離陸寸前で日本から来る飛行機に乗り換えるため6時間の待機となった。航空会社(事前の整備点検不備)の責任のため、10ドルほどの食事クーポンが渡された。外語大卒のたくましさで空港のレストランで早速パーティを開き、10年間皆勤の相馬さん(F昭和39)が免税で購入したワイルド・ターキーを提供願ってお祝兼反省会で盛り上がった。このウイスキーの生れたテネシー川はオハイオ川経由で旅行したミシシッピ川に流れ込んでおり旅行にふさわしい会合であった。成田には遅延したが17日夜無事到着した。

外語会第11回海外ツアーにご提案を

2004年はアメリカ南部セントルイス、メンフィス、ニューオーリンズとニューヨークを訪ねました。その記録は50頁をご覧ください。2005年第11回海外ツアーについては、神秘の大国インドへとか、ドイツ、オーストリアの世界遺産を訪ねたいとか、もう一度満天の星空のモンゴルがいいとか、いろいろな声があがっております。海外ツアーについてご希望、ご提案がありましたら、当委員会までお寄せください。会報6月1日号で詳細をお知らせできるように決めたいと考えております。